

第9章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 滋賀

1. シンポジウムの概要

テ ー マ：「広げよう地域における子育て支援の輪」

日 時：平成 19 年 2 月 6 日（火）13 時 00 分～16 時 30 分

場 所：草津市立市民交流プラザ

参加人数：65 人

開催目的：地域の人たちによる子育て支援活動を広め、活動を活発にするために、地域における子育て支援の実践事例から学ぶとともに、「地域における子育て支援をどう進めるか」をテーマに話し合う。

タイムスケジュール：

13：00～13：20 開会行事

13：20～14：20 基調講演「地域における子育て支援活動を進めよう」

講師：西田 久美子（大津市子育て総合支援センター「ゆめっこ」副所長）

14：20～14：50 事例発表

唐崎子育てグループ（滋賀県大津市）

報告者：中川 操 代表

NPO法人子どもネットワークセンター天気村（滋賀県草津市）

報告者：山田 貴子 代表理事

15：00～16：30 全体協議：テーマ「地域における子育て支援をどう進めるか」

メンバー

西田 久美子（大津市子育て総合支援センター「ゆめっこ」副所長）

山田 貴子 （NPO法人子どもネットワークセンター天気村代表理事）

中川 操 （唐崎子育てグループ代表）

コーディネーター

山本 富夫 （佛教大学講師）

16：30 閉会

2. 基調講演の主な内容

大津市子育て総合支援センター「ゆめっこ」（以下、「ゆめっこ」と称する）副所長の西田久美子さんに、「地域における子育て支援活動を進めよう」というテーマで講演をいただいた。

「ゆめっこ」は、子どもや子育て・子育て支援にかかわる人たちの出会いの場として、JR線浜大津駅近くのビルの3階に2006年4月にオープンした。館内には大型の遊具や砂場があり、子どもたちが自由に楽しく遊べる。しかし、「ゆめっこ」は立派な施設・設備を備えるだけではない。「ゆめっこ」に集う親子や子育て支援に携わる人など、子育てに関係する人たちを支援し、人々が子育て支援活動により携わっていくための調整をしている。つまり、直接的な子育て支援に加え、「ゆめっこ」を拠点に地域住民1人ひとりが安心と信



頼の気持ちを抱き、一緒に育ち合い育て合う関係を築いていくための援助を志している。したがって「ゆめっこ」が手がける事業は、「総合支援センター」という名称が示すように幅広い。

「ゆめっこ」の事業の柱やその背景にある「夢」は、どの居住地域でも共有できる視点や考え方であると西田さんは言う。こうした考え方は以下の3点に集約されるだろう。

1点目は、「愛し、愛される人間関係」を育むことである。合計特殊出生率が1.3を切り「1.29ショック」として騒がれたことは記憶に新しい。しかし、「いかに女性が子どもを『つくる』か」という形で少子化が論じられることは筋違いである。なぜなら、愛する人との子どもを授かりたいと願って子どもを産み、多くの人たちとさらなる愛情を育みながら暮らすことが大切なのであり、少子化に歯止めをかけることを目的とするのは順序が逆だからである。統計上の数字に左右されず、現実の暮らしを見つめて生きることが大切である。

2点目は、「さまざまな人と触れ合う体験」を取り入れることである。大津市の子どもたちは学校や幼稚園から帰ってきた後、ほとんどが「自宅」で過ごしている。このことは、自宅が居心地のよい場所であるともいえるが、裏を返せば、他に居場所がないということでもある。今の子どもたちは家族以外との人間関係を育むことが少なく、体験の幅が阻害されている。

たとえば核家族化・少子化によって減少した体験のひとつに、より幼い子どもたちとの触れ合いが挙げられる。幼い子どもと触れ合う経験が多い人は、子育てに対して「楽しい」というイメージを、反対に経験が少ない人は「辛い」というイメージを持つ傾向にあるという。したがって「ゆめっこ」では、地域での子どもとの触れ合いや、家族が「一緒に」する活動が重要であると考え、「親子や家族の交流・学習・体験事業」を意識的に設定している。

3点目は、「地域における、自分の意思を表現できる関係」を育むことである。現代社会では、周囲の評価や正解・不正解を気にするあまり、大人も子どもも自分の意思の表現・表明が難しい。自分の居場所は、自分の思いを自由に表明できる場であるともいえる。地域で誰かと一緒に何かをするときには、自分の思いや意見をあらわせる関係が必要である。

このようなことは、親の就労状況による子育ての負担感の違いにもあらわれる。共働きの親は、子どもを預けている保育所の保育士や親同士、職場の同僚たちとの語り合いや助け合いがあったり、仕事を通して自己肯定感を感じたりするため、負担感が少ない。逆に、家庭で育児に専念している母親は、その頑張りや認めたり、助言してくれたりする人が身近にいない場合、負担感がより大きくなる。このことは、子育て中の親たち1人ひとりに起因する問題ではない。既にそのようになってしまっている、社会の在り方に問題があるのである。

「ゆめっこ」が取り組む各種の体験事業では、「子どもに何かをしてあげる」のではなく、親自身が夢中になる体験を重視している。子育て中は、親は子どものことに集中せざるを得ない時期ではあるが、自分を見つめられる時間を持ち、1人の人間として生きる喜びを感じることで、自信を持って笑顔で子どもに向かい合い、それが子どもに返っていくと考えられるからである。育児中の母親・父親たちはみな一生懸命すぎて、子どもの発達や病気の心配に過敏になってしまったり、育児でパニックになりそうな自分を責めてしまったりするという。しかし、親も含めて1人ひとりの命や存在感は誰とも比べることはできず、みな尊い存在であるということ発信していくのも、子育て支援に携わる人々の仕事ではないかと提言した。

3. 事例報告の主な内容

「唐崎子育てグループ」

大津市で「ひよこ」「コアラ」「ポニー＆ラッコ」「バンビ」の4つの育児グループからなる「唐崎子育てグループ」代表の中川操さんから、活動の経緯の紹介があった。

1992年、中川さんが大津市の健康推進連絡協議会の母子保健活動として開いた子育て教室から、子育ての仲間づくり活動が始まった。子育て中の母親らによる自主運営と、いつでも希望者を迎え入れる体制が人気を呼んでいる。現在は、子どもの年齢別に上記4つのグループに分け、それぞれ月2回、年齢に合わせた遊びや季節の行事、母親たちの情報交換などをおこない、気軽に親子が集う場となっている。また、子育て支援センターや保育園・幼稚園などの関係機関との連絡会も開き、地域に根ざした活動を続けている。

近年、中川さんが活動を始めた頃には想像ができなかったほどに支援活動が活発化し、親子はさまざまな場所でいろいろな経験ができる。さらに待望の「ゆめっこ」がオープンし、総合的な支援が始まった。そこで中川さんは「役割が終わった」と感じ、活動の終結を考え始めた。しかし、年度途中にもかかわらず参加希望の連絡が次々に入り、活動を継続せざるを得なくなった。「子どもが好き、子育てをするお母さんが好き」という中川さんの思いが活動を支えており、第2・3子を出産した母親たちにとって実家のような存在となっている。

こうした活動では、家に閉じこもっている母子のケアにまで手がまわらない。しかしながら、訪れてくる母子には広く門戸を開き、来てくれたら寂しい思いをさせないよう場にうまく招き入れ、何度も来てくれるようにすることを念頭に置いて活動をしているという。

「NPO 法人子どもネットワークセンター天気村」

「NPO 法人子どもネットワークセンター天気村」代表理事である山田貴子さんから、自主保育園である「こんぺいとう自然保育園（以下、「こんぺいとう」と略す）」の紹介があった。「こんぺいとう」の名は、「子どもには、金平糖のようにいろいろな形があり、削って丸くそろった形にするのではない」という意味から付けられたものである。「こんぺいとう」は、現代社会の特徴である効率や管理、コントロールの中に子どもたちを入れずに、子どもの潜在的な力や想像力を育みたいと、あえて無認可の形をとっている。

「こんぺいとう」には、1日や1ヵ月のスケジュールはない。子どもは「今」を生きているから、その日の天気や子どもたちの気分などによって、その日に活動内容を決める。外に出ると、子どもたちの元気な声を聞いた地域のお年寄りが出てきてくれ、見守ってくれる。

ここでのモットーは、「地球が遊び場」である。最近、「子どもに遊び場がない」と言われているが、子どもは何でも面白いので、大人の気持ち次第でどこでも遊び場になる。「保育園」といっても、先生が子どもたちに教えているのではなく、裏方や背景になって子どもたちの育ちを見せてもらっている、という立場で子どもたちに接している。「子育て支援」を高らかに叫ぶのではなく、大人は子どもに学ぶべきである、との考えのもと、活動はおこなわれている。

4．全体討議の主な内容

全体討議は、仏教大学講師の山本富夫先生をコーディネーターに迎え、和やかな雰囲気の中、フロアから感想・質問を自由に挙げてもらう形式ですすめられた。

それぞれの報告者に対する感想には、「唐崎子育てグループ」の中川さんと近い年代の方の参加が多か



ったためか、中川さんの思いへの賛同や活動に対する励ましが多く聞かれた。大津市からの参加者からは、「ゆめっこ」で手がける幅広い子育て支援活動への共感や感謝の言葉があったり、「こんぺいとう保育園」での取り組みに「元気をもらった」という感想があったりした。

参加者の関心は、「実際に身近な地域で支援を行う場合に留意すべきポイント」であったように思われる。それに対する、3人の報告者の意見を以下に簡単に紹介する。

地域の資源を活かすこと

子・孫育てから一段落した世代の力は重要である。手伝いをするだけで子育て支援ではない。道で子どもたちに声をかけたり公園に危険がないか目配りしたり、地域の祭りに参加したりするなど一緒に活動することで、地域での人間関係が築かれ、子育て支援の基がつくれる。また、さまざまな人が交じり合うところからエネルギーが生まれるので、直接「子育て」に関係のない「異業種」の人にも積極的に参加を呼びかけたい。

高いお金を払って講師を呼ぶ必要は必ずしもない。地域の人々の、それぞれ得意なことや特性を活かして教え合いをすればよい。そのように考えれば、決して「子育て支援」は壁の高い、難しい行為ではない。身近なところから少しずつ、取りかかっていくべきである。

経験・体験の中からの「学び」を大切にすること

人間関係に余計な気遣いをして育った経験がある母親が多く、親になった今も、人間関係をわずらわしく感じたり、子どもへの影響に悩んだりしている。まずは、人とかかわることが心地よいということ、家族で体験してもらうことが大切である。それとともに、1人ひとりが大切な存在であり、大人も子どもも1人の人間として理解し合える関係づくりが必要である。

「基本的な生活習慣を身につけること」や「本をたくさん読むこと」も子どもにとって重要であるが、それよりも「家族と楽しくおしゃべりしながら食事をする」と「大好きな人と本と一緒に読むこと」といった、「過程」を大切にしたい。たとえば、近所の大好きなおばちゃんに挨拶したい、といった感情が、基本的な生活習慣などにつながるのではないだろうか。

子どもの遊びや体験の幅の狭さの克服のために、「がけ登り」を勧めたい。なぜなら今は、「上へ」「前へ」と追い立てられ、「下がる」「落ちる」経験はなかなかできない。人はそれに適応した体になってしまっているが、その後の子どもの人生を幅広くするのに豊かな体験がきっと役に立つはずである。大人がまず、発想の転換をして、変わっていかなければならない。

最後に山本先生から、親子や近所の人間関係は信頼で成り立つものであり、「共に育つ」という視点で実践をしていけばよいのでは、というアドバイスがあった。



5 . シンポジウムの感想

基調講演・事例報告・全体討議とも、魅力あふれる実践を分かりやすく報告していただいたおかげで、大変好評であった。特に、70歳を超えてなお、地域に根ざした活動を精力的におこなう中川さんに共感を覚えたようである。さらに、社会の変化を指摘し、家族や地域の人との愛情を育むことを強調した西田さんの講演や、大人の凝り固まった発想を転換し、自然の中で「子どもに教わる」ことを日々体感している山田さんの報告も併せて、子育てや子育ての原点をあらためて感じたようである。「子育て」とは自然なことであり、子どもと共に育ち合うことを忘れずに、日々の生活でできることから始めたい、という感想が見られた。